

08/12/05

資本論 第23章 第3節

相対的過剰人口または産業予備軍の累進的生産

報告者 橋本

資本蓄積と労働力の需給動向

*資本の蓄積は、資本構成の不断の質的变化（可変成分を犠牲としての不変成分の不断の増大）を伴って行われる。有機的構成の変化

*不変資本部分と可変資本部分の割合は 蓄積の進行に伴って $1 : 1 \Rightarrow 7 : 1$

*総資本の増大につれてその可変部分、すなわち総資本に合体される労働力も増大はするが、増大の割合は絶えず小さくなってゆく。

*増大する蓄積と集中とは、それ自身また資本の構成の新たな変化の、すなわち資本の不変成分に比べての可変成分のいっそう速くなる減少の、ひとつの源泉になるのである。

*資本主義的蓄積は、・・・絶えず、相対的な、すなわち資本の平均的な増殖欲求にとってよけいな、したがって過剰な、または追加的な労働者人口を生み出すのである。

*社会総資本をみれば、蓄積の運動は周期的変動を呼び起こし、またこの運動の諸契機が同時にいろいろな生産部面に配分される

*いくつかの部面では；資本構成の変化が資本の絶対量の増大なしに、単なる集積の結果として起きる。

*ほかの諸部面；資本の絶対的増大が、あおの可変部分またはそれによって吸収される労働力の絶対的減少と結びついている。

*また別の諸部面；資本が、あるときは有機的な変化が生じて資本の可変部分が縮小する。

*その部面でも；可変資本部分の増大、就業労働者数の増加は、つねに激しい動揺と一時的な過剰人口生産とに結びついている。

*過剰人口生産の形 ①すでに就業中の労働者をはじき出すという目に立つ形

② 追加労働者人口を通常排水溝に吸収することが困難になるという人目につかないが効果は劣らない形

*資本の有機的構成や資本の技術的形態の変化はますます速くなり、あるときは同時に、あるときは交互に、この変化に襲われる生産部面の範囲は広がる。⇒労働者人口は、それ自身が生み出す資本蓄積に連れて、ますます大量にそれ自身の相対的過剰化の手段を生み出す。これこそは、資本主義的生産様式に特有な人口法則である。

イングランドとウェールズの事例

*しかし、過剰労働人口が資本主義的発展の産物であるとすれば、逆に、これは資本主義

的生産様式のひとつの存在条件となる。

*蓄積と労働の生産力の発展につれて、突発的な資本の膨張力が増大する。← ①現に機能している資本の弾力性が増して絶対的富が増大する、②信用が富の異常な部分を追加資本として役立てる だけでなく、③生産過程そのものの技術的諸条件が最大の規模で追加生産手段への剰余生産物の急速な転化を可能にするからだ。

*追加資本に転化できる富は、古い生産部門または新しい生産部門に押し寄せる。この場合人間の大部分は突発的に、他の生産部門を犠牲にすることなく、投入される必要があるが、これを供給するのが過剰人口。

*近代産業の生活過程（中位の活況、生産の繁忙、恐慌、沈滞）が10年ごとの循環をなしているのは、過剰人口の不断の形成、吸収、再形成にもとづく。産業循環の諸局面は過剰人口の再生産動因のひとつ。

*このような 近代産業の生活過程は、過去の歴史上も、資本主義幼年期にもみられないもの。生産規模の突発的、発作的膨張。近代産業の全運動形態は労働者人口の一部分が絶えず、失業者または半失業者に転化することから生ずる。

*経済学の浅薄さ：転換の兆候でしかない信用の膨張や収縮を、転換の原因ととらえていること。

フランス語版の挿入

*メリヴェールの言：恐慌時に過剰人口が移民によって流出すれば、回復したとき不足が現れる。工場主の利潤は、需要の盛んな好機を利用して不況期の損失を埋め合わせることにかかっている、それを保証するのは機械と筋肉労働に対する指揮権だけだ。

*偏狭なマルサスでさえ・・・；一国は、つねに、その労働財源が人口よりも急速に増加するようになりやすい状態にある。

*これまでは、可変資本の増減には就業労働者数の増減が対応する、という想定。しかし、労働者数が不変または減少しても、可変資本が増大するケースあり。：労働者数不変か減少⇒ひとりひとりがより多くの労働を供給⇒労働の価格は変わらなくても労賃は上昇または労働の価格が下がってもその低下が労働者の増加より緩慢なら、かれの労賃は増える。つまり、資本家の絶対的関心事は、一定量の労働をより少数の労働者からしぼりだすこと。

*すでに見たように、①同額の可変資本を投下してもこの労働力の外延的、内包的な搾取の増大によってより多くの労働を流動させる ②同じ資本価値でより多くの労働力を買うようになる。⇒熟練を不熟練に、男子を女子に、成年を幼年に駆逐。こうして蓄積の進

行につれて①より大きい可変資本がより多くの労働者を集めることなしに、より多くの労働を流動させる、②同じ大きさの可変資本が同じ量の労働力でより多くの労働を流動させる、③最後に高級な労働力を駆逐して、より多くの低級な労働力を流動させる。

***それゆえ**、相対的過剰人口の生産は、生産過程の技術的変革よりも、可変資本部分の比率的減少よりも、もっと速く進行する。

*労働者階級の就業部分の過度労働はその予備軍を膨張させるが、逆に予備軍が就業部分に加える圧力も増大する。このことは資本家の到富手段になり、社会的蓄積に対応する規模での産業予備軍の生産を速くする。

イギリスの例 1863年の綿花飢饉

***だいたいにおいて**労賃の一般的な運動は、労働者人口の絶対数の運動によって規定されるのではなく、産業循環の局面転換に対応する産業予備軍の膨張、収縮に規定される。

*近代産業は10年後の循環とその周期的な諸局面があるが『労働の需要供給が資本の膨張、収縮によって規定されているのではなく、資本の運動が人口の絶対的な運動に依存する、という法則、これは経済学的独断。：独断野考え方 ①資本蓄積の脚気労賃は上がる。労働者人口の加速的増加に拍車をかけ、労働市場は供給過剰となり、それに対して資本は不足。で、労賃は下がりというメダルの裏側。あるいは、②労賃の低下と搾取の増大とは、再び蓄積を速くするが、他方、低くなった賃金が労働者階級の増大をさまたげる、供給が需要を下回り、賃金があがる、という繰り返し。

*イギリス農業地方の例 上の経済学の独断を批判する実例ですか？ 借地農業社たちは、上昇した賃金が下がるのを待ったのではなく、彼らはより多くの機械を採用した。こうして労働に対する需要は相対的にだけでなく、絶対的にも減少した。

***あの経済学の作り話は**、つまり上の独断でしょう、労賃の一般的な運動を規制する諸法則、またはそう労働力と社会的総資本との関係を規制する諸法則を、労働者人口を特殊な諸生産部門のあいだに配分する諸法則とを混同している。というのは、ここでみているのは、ひとつの特殊な生産部面の労働市場の局部的な変動だけ。

*で、産業予備軍は沈滞や注意の活況の時期には現役労働者を圧迫し、過剰生産や発作のt機には現役軍の要求を抑制する。だから相対的過剰人口は労働の需要供給の法則が運動する背景なのだ。

*経済学的弁護論にたちかえってみると、新しい機械の採用や古い機械の拡張によって可変資本部分の一部が不変資本に転化される場合、労働者を「遊離させる」操作、これを弁護論者たちは労働者のために資本を遊離させる、と説明する。そうでなくて、遊離させられるのは機械に寄よって直接に駆逐される労働者だけではなく、彼らの補充院も。普通の拡張の場合、規則的に吸収される追加隊も。機械が投げ出したのと同数の労働者を市場からつれてくるのに、これだけの資本で十分なら、一般的労働需要への影響はゼロ。つま

り、資本主義的生産の機構は、資本の絶対的増大に伴ってそれに対応する一般的な労働者需要の増大が生ずることのないようになっている。

*労働に対する増大は資本の増大とおなじことではなく、労働の供給は労働者階級の増大と同じことではない。資本の蓄積が労働に対する需要をふやすとき、他方でその蓄積が労働者の「遊離」によって労働者の供給をふやすのであり、同時に失業者の圧力は就業者により多くの労働を流動させることを強制して、労働の供給を労働者の供給から独立させる。→資本の専制の完成。だからこの機構をみぬいて労働組合などによって就業者と失業者の計画的協力を組織しようとする、資本とその追従者である経済学者とは『需要供給の法則』侵害だ、とさげふ。

*他方、例えば植民地で、反対に作用する諸事情が産業予備軍の創出をさまたげ、資本家階級への労働者階級の絶対的従属を妨げるや否や、強制手段によって押さえ込もうとする。

宇野による批判（『資本論』と恐慌論 二）

1. 資本の蓄積が生産方法の改善をなしつつ行われて、その有機的構成の高度化とともに相対的過剰人口を形成するという、資本主義に特有なる人口法則の基本的規定はマルクスの経済学的業績の一つをなすもの。しかし、有機的構成の変化は蓄積の進行よりはるかに急速に行われる、と言うとき、有機的構成を決定する重要要因である固定資本部分について考慮していないのは、極めて注目すべきこと。資本家的生産方法の技術的変革は一定の時期に集中する傾向がある。そのことはマルクスも「資本の回転」を考察するときは認めているし、相対的過剰人口論でも中間休止期がなくなるとは、言っていない。が、この「中間休止期」と「絶えず生産される過剰の労働人口」との関係は問題とされていない。技術的基礎の変革は不断に行われるわけではない。問題は、「資本によるより大なる牽引が」如何ようにして「そのより大きな反撥と結びつけられている」ということ。景気循環と人口法則とは、資本の有機的構成の高度化を決定する固定資本の更新を媒介にして、内面的な相互規定関係にあるのであって、マルクスのように一方的に人口法則を過剰人口の不断の形成に偏して説くことは、恐慌論の展開を妨げる原因となる。
2. 過剰人口論と「窮乏化法則」 「資本主義的蓄積の一般的法則」は、労働力に関しても「一般的」規定をもって展開されるべき。

報告者の疑問点

- ① 「中間休止期」というのは、資本構成不変の状態を意味しているのか？
- ② s661 “信用が富の異常な部分を、、” この信用とは？手形？
- ③ 宇野の言う、恐慌論の展開を妨げるとは、どのように？